

## 短 報

***Desmodium*, *Hylodesmum* および *Ohwia* 属の和名 (大橋広好)**

Hiroyoshi OHASHI: Japanese Names of Genera *Hylodesmum*, *Desmodium* and *Ohwia* (Leguminosae)

最近 *Desmodium* 属を3属に分割した (Ohashi 1999, Ohashi and Mill 2000). *Hylodesmum* 属をヌスビトハギ属, *Ohwia* 属はミソナオシ属としたが, *Desmodium* 属の和名を長い間呼び慣わしてきたためか, うっかりとこれもヌスビトハギ属としてしまった (Ohashi 1999). 属の和名はヤナギ属, サクラ属などのような包括的なものの他にはふつうに野生する在来種の標準和名と一致するものが多い. 従来のヌスビトハギ属という和名はその一例であった. 新しい範囲の *Desmodium* 属の和名はシバハギ属としたい. この属の日本産種の中では静岡県以西に分布し, 最も分布の広い種であるシバハギ *D. heterocarpon* (L.) DC. に基づくものである.

ヌスビトハギはこれまでの分類では subgen. *Podocarpium* (Benth.) H.Ohashi に所属する *Desmodium podocarpum* DC. の種内分類群である (Ohashi 1973). Subgen. *Podocarpium* の種類は主に森林生の多年草であり, その形態的特性は既に明らかにされていた (Ohashi 1973). この亜属の中国産の種類は Yang and Huang (1979) によって *Desmodium* とは別属とされ, *Podocarpium* Y.C.Yang & P.H.Huang と命名されていた. しかし, subgen. *Podocarpium* はインド, 東南アジア, 東アジア, 北アメリカにも分布しており (Ohashi 1973), 中国産の種類だけを別属とする見解は受け入れがたいものであった (Ohashi 1995a, 1995b). さらに, *Podocarpium* という属名には先行同名があるので, 別の属名が必要であった. このため, 最近私と Mill はこの亜属を再検討し, 一部の節を除いて亜属を属に格上げし *Hylodesmum* H.Ohashi & R.R.Mill として独立させた (Ohashi and Mill 2000). この属の和名はヌスビトハギ属とするのが自然であろう.

ミソナオシは既に1852年に Bentham が独立属として *Catenaria* を設立したが, この名前は後続同名であり, 新名が必要になったの

で, *Ohwia* とした. *Desmodium* や *Hylodesmum* とは花内蜜線がある点で異なり, 分子系統解析でも独立である (Ohashi 1999). 最近中国から新しい1種が発見されて, 2種よりなる属である. *Ohwia* は大井次三郎先生に献名したもので, ミソナオシ属とした.

The Japanese names for genera *Desmodium*, *Hylodesmum* and *Ohwia* are explained. *Hylodesmum* and *Ohwia* were separated from *Desmodium* (Ohashi 1999, Ohashi and Mill 2000). *Desmodium* had been called “Nusubito-hagi zoku” in Japanese based on the Japanese name of *Desmodium podocarpum* DC. subsp. *oxyphyllum* (DC.) H.Ohashi, “Nusubito-hagi”, probably because this plant is the commonest *Desmodium* in Japan. The subspecies was transferred to *Hylodesmum* H.Ohashi & R.R.Mill (Ohashi and Mill 2000) and naturally the Japanese name of *Hylodesmum* was named “Nusubito-hagi zoku” (Ohashi 1999). A new name become needed for *Desmodium* in the new circumscription and “Shiba-hagi zoku” is newly proposed for the genus. *Ohwia* was named “Misonaoshi zoku” based on its Japanese name of *Ohwia cordata* (Thunb.) H.Ohashi (Ohashi 1999).

## 引用文献

- Ohashi H. 1973. The Asiatic Species of *Desmodium* and Its Allied Genera (Leguminosae). 318 pp., 76 pls. Ginkgoana 1. Academia Scientific Book Inc., Tokyo.
- 1995a. The taxonomic position of two taxa of *Podocarpium* (Leguminosae) from China. J. Jpn. Bot. 70: 140–143.
- 1995b. An enumeration of Chinese *Desmodium* and its allied genera (Leguminosae). J. Jpn. Bot. 70: 111–117.
- 1999. The genera, tribes and subfamilies of Japanese Leguminosae. Sci. Rep. Tohoku Univ. 4 ser. (Biol.) 40: 187–268.

- and Mill R. R. 2000. *Hylodesmum*, a new name for *Podocarpium* (Leguminosae). *Edinb. J. Bot.* **57**: 171–188.
- Yang Y. C. and Huang P. H. 1979. *Podocarpium*

(Benth.) Yang et Huang—Genus novum familiae Leguminosarum. *Bull. Bot. Lab. North-East. Forest. Inst.* **4**: 1–15 (in Chinese).

新 刊

□ Kapoor L. D.: **Handbook of Ayurvedic Medicinal Plants** 416 pp. 2001. CRC Press, Boca Raton, Florida. ¥23,000.

本書は1990年に刊行されたものの再版とのであるが、序文や巻末の文献リストを見る限り、改訂増補はないようだ。文献リストには900件が記録されているが、著者順でも年代順でもなく、引用番号順なので使いにくい。250種類の植物について記述されている。66の植物図のほとんどは、Kirtikar & Basu: *Indian Medicinal Plants* から転載したものである。どの種類についても11の見出しの下に同じ記述形式をとっていてわかり易い。見出しは、学名、土名、植物の簡単な記相、薬用とされる部分、生薬学的形質、アユルベーダ的記述、アユルベーダの効果と用法、化学成分、生薬学的作用、医療上の特性と用法、用量である。アユルベーダに関する二つの見出しでは、三体液 Vaata, Pitta, Kapha の様態についての原典の用語がそのまま用いられているので、門外漢にはわからない。これについては巻末の Basic concepts of Ayurveda, Introductory notes on the fundamental principles of Ayurvedic pharmacology の章で簡単な説明がされていて、理解の助けになる。アユルベーダの原典の単語を辞書で引いても、あまりに内容が多様で、どの解釈がまともなのかかわからない。これについては巻末の Glossary of Ayurvedic terms が役に立つだろう。

土名の項にはたくさんの言語によるその植物の名前が示されている。これはこの種の文献の定番であるようだが、いろいろな文献から次々とひき写されてきているので、この本について言うわけではないのだが、用心する必要がある。また、本書では130を超える和名が記録されており、多くは妥当なものだが、中には困ったものもある。たとえば *Acacia arabica* (Indogom), *Albizia lebek* (Pabanemunoki), *Bergenian ligulata* (Yukinoshita), *Eugenia jambolana* (Natsume), *Swertia chirata* (Senburi),

*Ruta graveolens* (Matsukareso)。これらは和名の情報提供者に責任があるわけだが、もう一つの問題は情報提供の仕方による誤りである。たとえば *Viola odorata* (Nioisumaire), *Gloriosa superba* (Yurigurama), *Cedrus deodara* (Himarayosugi) のような、口写しによる誤りや手書き文字の転写ミスなどである。とくに手書き文字の読み誤りは、情報提供者と受容者の文化や常識の違いで無意識に発生するので、提供側が十分留意せねばならない。外国の標本ラベルから情報を取るときに、誰でも経験することだろう。Matsukareso も、音写の際の誤りと思う。

文字で書かれた名前を読み上げて別な文字に転記する際にも問題がある。たとえばネパール人がデワナガリ文字を読み上げるのと、同じ綴りを日本でヒンズー語の学習者が読み上げるのとでは、ずい分違った音になるということを経験したことがある。土名の項には、われわれが心すべきエラーがまだある。たとえば *Cucumis sativus* のネパール名は Tushi とされているが、これはネワール名で、ネパール名は Kankro である。われわれが現地で植物の土名や地名を記録する際、それを口にした相手がどんな tribe であるかを気にすることは、民俗学研究者は別として、ほとんどない。そして野帳には、「ネパール名～」と記録してしまう。ネパールとネワールでは言語体系が全く異なるので「ネパール人」の間でさえ通用しない。これからは海外で調査活動をする機会が一層多くなるのだから、他山の石とすべきである。そうでないと、情報が多くなった分、あいまいさが加速度的に増加するだろう。ある英和大辞典の改訂の手伝いをしたことがあるが、いくつかの原書の同じ見出しに含まれる植物名をみんな取り込んで「総合的」にしたつもりでいるので、お手軽に過ぎるのではないかと思ったことがある。

(金井弘夫)